

奈良・興福寺旧境内

- 1 所在地 奈良市登大路町
- 2 調査期間 一九九三年(平5)三月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 清水康二・小栗明彦
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 一一世紀後半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良)

調査地は、奈良時代においては興福寺北面築地塀のすぐ内側にあたる場所である。平城京の条坊では、左京三条七坊七坪の東北隅に位置する。江戸時代には興福寺の子院である吉祥院の敷地であった。

本地点は一九九二年度には奈良県文化会館の駐車場になっており、文化会館に通じる渡り廊下の下、東側である。現在の裁判所の所在する西方から徐々に低く

なった谷底にあたり、また東の県庁舎に向けて地形は高くなっている。

発掘調査区は、地形的に比較的遺構の残る確率が高いと考えられる調査対象地の東半分に、二三m×三mのトレンチを設定して遺構の有無の確認を行なうことにした。アスファルト及びその下に敷かれた碎石を除去するとすぐに礫を多く含む明褐色の地山があらわれる。地山の観察によれば、付近は以前の県庁の建物の基礎によって大規模に削平されている模様であった。遺構は瓦の多く詰まった土坑(井戸状遺構)の一部が検出されたのみであった。この土坑のほか、東側端には遺構が残存している可能性があるため、南北一三・五m、東西五mの拡張区を設けることにした。拡張の結果も遺構は土坑の続きを確認したのみで、この付近の浅い遺構はすべて削られて残っておらず、深い遺構だけがろうじて残っているに過ぎないことが判明した。

土坑の規模は、一辺約二・一mの隅丸方形である。辺はほぼ方位にあっている。深さは確認面から約三・二mである。石組及び木組は見られず素掘りの井戸の可能性もある。底は既に礫層を掘りぬき青灰色の粘土層に到達している。堆積土は大きく六つの層にわかれる。最下層には青灰色砂質土が薄く堆積している。次に黒色土が堆積していて、木製品及び土器が廃棄されている。その上には青灰色粘質土が一度に埋まったと考えられる状況で堆積している。次には

木製品(木簡、将棋駒など)、土器などが廃棄された状況で含まれる。

この黒色粘質土は木の葉や自然木の枝などを多く含むので、一定年月の間本遺構を埋めるような作業は行なわれていなかったものと考えられる。さらに上の土層は青灰色、明黄褐色粘質土であるが、これには木製品がほとんどみられない。ただし黒褐色粘質土の直上ではわずかに木製品が混入する。最終的な埋土として現在削平されずに残っているのは、瓦が大量に廃棄されている土層である。これは一括して投棄されたことが明らかである。また遺構の底には、一辺四五cmの隅丸方形の浅いピットがあった。

この遺構は、通常の石組、木組が見られない点、現在では水が涌かない点などから、井戸の掘削を途中で中止した後、それを利用してゴミ捨て穴として転用した可能性が考えられる。

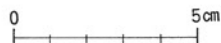
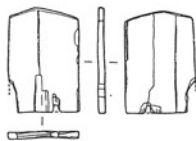
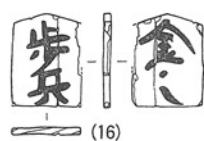
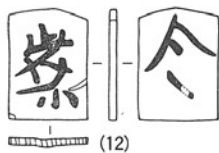
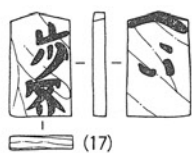
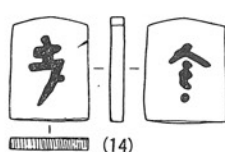
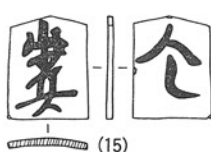
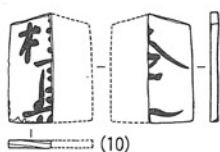
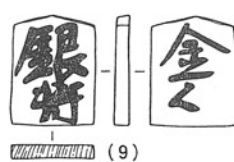
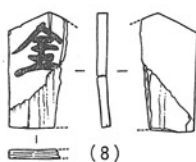
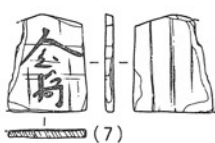
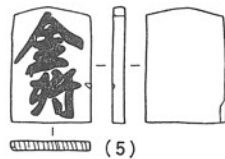
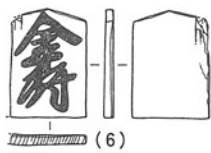
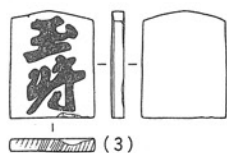
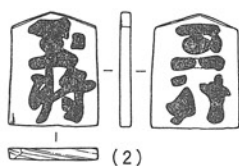
出土遺物は、瓦が整理用コンテナ約五四箱、土器が約八箱、木製品が約一八箱である。

出土遺物の中で注目されるのは、平安時代の将棋の駒一五点(玉将三、金将四、銀将一、桂馬一、歩兵五、不明二)、将棋関係の習書木簡二点、紀年銘木簡(天喜六年七月廿六日)を含む木簡数点、刀形木製品などで、黒褐色粘質土層から出土している。また黒色土層からは、穂杖の玉数点、杖一点、刀形木製品などが出土している。

全ての遺物を検討していないので流動的ではあるが、この遺構は土器型式よりすれば一一世紀後半代に埋まったものと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1)	・「天喜六年 七月廿六日 北宿□ _(所カ)	(54)×18×3 061
	・「梨原御房 (題籤軸)	
(2)	・「玉将」 ・「玉将」	31×24×3 061
(3)	「玉将」	29×23×3.5 061
(4)	・「玉将」 ・「成カ」 □	33×24×5 061
(5)	「金将」	31×20×3 061
(6)	「金将」	30×20×2 061
(7)	「金将」	30×20×3 061
(8)	「金」 _(将) □	32×15×3 061
(9)	・「銀将」 ・「也カ」 「金」 _(也カ) □	30×21×4 061



(10)	・「桂馬」 ・「金」 ・「也」 ・「カ」	31×(12)×3 061
(11)	・「歩兵」 ・「金」 ・「カ」	(69)×17×3 081
(12)	・「歩兵」 ・「金」	31×21×2 061
(13)	・「歩兵」 ・「金」	29×16×4 061
(14)	・「歩」 ・「金」 ・「カ」	28×21×3.5 061
(15)	・「歩兵」 ・「金」	28×20×2 061
(16)	・「歩兵」 ・「金」 ・「将」 ・「カ」	25×18×2 061
(17)	・「歩」 ・「金」 ・「カ」	29×17×4 061

(18) 〔不カ〕
・ 〔 〕
・ 〔 〕
・ 〔 〕

(74)×17×5 019

(19) 〔 〕
・ 〔 〕
・ 〔 〕

(55)×(21)×4 081

(1)は下端部の状況から題籤軸かと推測できる。天喜六年(一〇五八)八月二九日に康平と改元されたが、天喜六年七月廿六日の日付は矛盾しない。内蔵寮領の梨原庄があり、春日祭使の宿所とされた。「梨原御房」はその宿舎をさすかと思われる。発掘調査地域のすぐ西北に奈良市内侍原町の地名が残っている。

(2)は裏にも「玉将」とあり、現行の駒と異なる。(3)は表のみ。(4)は裏面にも文字がみえるが、「玉将」ではない。(5)と(6)はよく似た金将の駒。(7)は側面および裏面の一部分が焼けこげている。(8)は全面黒こげとなっている。赤外線テレビで「金」字を確認した。(9)の裏面は二文字で「金」字は楷書体であり、ともに現行の銀将の駒とは異なる。裏面二字目は「也」の可能性が大きく、「金ナリ」の意か。すでに成駒のルールが存在したことを確認できる。(10)の裏面は二文字で、「金」字は草書体。(11)は短冊形の木簡に「歩兵」と書き、裏面は駒形を描き「歩兵」と書く。当初、歩兵の駒の未製品かとも考えたが、「歩兵」の字の位置が表と裏で相互に異なり、また歩兵

の駒なら裏は「金」でなければならぬから、その可能性はなく、用途は不明と言わざるをえない。(12)の裏の「金」字は草書体。(13)の表は「歩兵」と読みきるには少し問題を残すが、裏面の「金」からみて「歩兵」でよいだろう。「金」字は草書体。(14)の表は「歩兵」ではなく「歩」。裏面の「金・」の「・」は「也」の略号かもしれない。「金」は草書体に近い。(15)の裏の「金」は草書体。(16)の裏面は「金」ではなく「金将」。(17)の表の二字目は「兵」ではない。(18)は文書木簡。(19)は付札であるが、墨痕薄く、読めない。その他、小形の方形板に習書したものがあり(長さ八五mm幅八〇mm厚さ六mm。下図参照)、表面は「歩兵」「金将」「酔像」など、将棋の駒の名の習書、裏面は平仮名の習書である。「酔像」は酔象に通じ、中将棋の駒の名である。

これまで最古の将棋の駒は、兵庫県の深田遺跡(但馬国府推定地)から出土したもので、伴出した木簡に「嘉保」の年号(一〇九四〜九五)がみえる『木簡研究』九。今回の将棋の駒は(1)と伴出したのでそれよりも古く、また多様な駒が出土していて、将棋史の上でまことに貴重である。以下、気づいたことを列挙すると、駒は全て五角形で、ほぼ同じ大きさだが、玉将の駒がやや大ぶりである。玉将、金将、銀将、桂馬、歩兵の駒が計一五点あり、方形板の習書に酔像(象)がみえている。藤原行成(一〇二七年に没)の『麒麟抄』には、裏の「金」字は草書体とするが、楷書体のものもある。駒が成るルール

がすでに確立しており、「金成」「金・」の表記が興味深い。これまで玉将の駒は鎌倉末期の新安海底船出土のものが最古だったが、(2)(3)(4)に玉将がみえる。一方、王将の駒はない。玉・金・銀・肉桂・沈香という五宝觀念に基づく駒の名称がより古いとも考えられる。一二世紀初めに成立した『二中歴』には、小将棋と大将棋(酔象はない)がみえているが、(20)にみえる酔像(象)は中将棋の駒であり、一一世紀半ばにはすでに中将棋が成立していた可能性がある。一四世紀に中将棋が広がったとする日本将棋史の通説を根底から覆すものとして、きわめて注目されるものである。

9 関係文献

清水康二・小栗明彦「奈良市興福寺旧境内発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』一九九二年度、一九九三年)



(1) 7・9 清水康二・小栗明彦
8 和田 萃